

1 A1区の調査

中層 (縄文時代中期中葉～後葉)

上層から約60cm下(標高約5.4m)で、縄文時代中期(約4,500年前)の遺構・遺物が見つかりました。遺構は^{たてあなじゆうきょ}竪穴住居1軒・^{はいせき}土坑・^{すみまるとう}配石・遺物集中などを検出しました。竪穴住居は調査区外に及ぶため全容は不明ですが、平面は隅丸方形をなすと思われます。深さは約20cmです。住居内の東寄りでは、^{いしがこいろ}石囲炉が見つかりました。炉の底面は割れた土器が敷きつめられたようになっています。建物内から出土した遺物はさほど多くありませんが、南側壁面近くの床面直上で、土器がつぶれた状態で出土しました。

遺物は^{ちゆうちゆう}中期中葉～^{こうよう}後葉の土器が出土しています。石川県や富山県を分布の中心に持つ、北陸系の上山田・天神山式土器を主体に、東北系の^{たいぎ}大木8b・9式土器などがあります。石器は、当地域でよく見られる^{かいがらじょうはくへん}貝殻状剥片や^{じゅもんがん}蛇紋岩の^{まぜいせき}磨製石斧が出土しています。特に磨製石斧は、ほとんどが未製品であることや、周囲には加工した際のチップ(石屑)がたくさん見られることから、磨製石斧の製作が生活の一部に組み込まれていたことが分かります。

この中層は、昨年までの調査で遺構は検出されず、遺物も^{まもつ}摩耗したものが多かったことから、これらは洪水などによって運ばれてきたものと考えられていました。しかし、今回の調査で、縄文人が定住していたことを示す遺構が見つかったことは、大きな意義があります。

分布する傾向がうかがえます。ピットのなかには、こぶし大またはそれよりも大きい礫が数個投げ込まれているものもありました。

遺物は、遺構や遺物包含層から数多くの土師器や須恵器とともに、^{たたいし}砥石・^{かつせき}敲石などの石器や、ヒスイ・^{てつせき}鉄石英・^{かっせき}滑石の原石が出土しました。



A1区 掘立柱建物全景



A1区 ピット断面

2 AP1区の調査

上層 (古墳時代～奈良・平安時代)

古墳時代～古代の遺構・遺物が見つかりました。調査区は北から南へ緩やかに傾斜します。標高の高い北側(標高約5.8m)に遺構・遺物は多く見られます。遺構は掘立柱建物・土坑・溝・多数の柱穴・水田などがあります。柱穴の多さから建物が幾度も建て換えられてきたことが推察できます。

大型の掘立柱建物は、8世紀のものと思われます。桁行5間(11m)、梁行2間(5.8m)を測り、北側に深さ約20cmの溝を持ちます。柱穴はほかに比べて特に大きいです。

このような大型建物は、一般の集落で見られることは少なく、有力者もしくは、公的な性格を持っていた施設の可能性があります。



A1区 竪穴住居 遺物出土状況



A1区 土坑内の埋設土器

上層 (古墳時代～奈良・平安時代)

A1区は橋台予定部分約300㎡を調査しました。調査の結果、奈良・平安時代の掘立柱建物・溝・土坑・ピット・杭などを検出しました。掘立柱建物の長軸は東西方向を向き、調査区外へ広がるため規模は不明ですが、桁行3間(7.3m)、梁行2間(3.0m)以上の大きさです。柱穴は、長径50～87cmで、2.3～2.7m間隔で並んでいました。柱穴の覆土に残されていた痕跡から、柱の太さは20～25cm程度であったと推測できます。

また、調査区の北から西へ向かって蛇行する溝が見つかりました。規模は幅40～90cm、深さ10～25cmほどです。A1区では140基を超えるピットを検出しましたが、この溝よりも北西側に多く



AP1区 大型の掘立柱建物



AP1区 柱穴から出土した土器・礫